

七〇年もの壁を越えるには

南丹市立園部中学校
一年 藤内 空菜

「七〇年も越えられない壁を越えるにはどうしたいのだろう。」

「ロシアと日本の間にある北方領土をめぐる問題は、すでに七〇年という長い年月、解決することなく続いています。それなのに、同じ日本人でありながらこの問題を「自分とは全く関係ない。」と思っている人も少なくないかも知れません。私もその一人でした。」

中学校に入り、北方領土について学び、驚きの事実を知りました。第二次世界大戦後、ソ連軍は突然日本を占領し、日本人を追い出したのです。私はこれが許せませんでした。それなのに現在日本はロシアに医療支援を行つてゐるのです。どうして日本から領土を奪つたロシアを助けるようなことをしているのか。到底理解できませんでした。

一方でこんな出来事を知りました。六年前、日本が東日本大震災にあつた時、様々な国の中で、ヨーロッパのセルビアという国が日本を支援してくれました。セルビアは経済状態が苦しく、国民の平均収入は世界の平均収入の半分と言われています。それなのに二億円の寄付金を集めてくれたのです。なぜそのまでの思いを寄せてくれたのでしょうか。セルビアは一九九八年に起きたコソボ紛争により壊滅的な状況になりました。でもコソボのアルバニア人をセルビアが虐殺したとして非難の目にさらされていたので、支援を受けることが難しかったのです。そんな時、真つ先に支援を行ったのが日本でした。

日本は医療、交通整備などの支援を行いました。このことをセルビアの人々は深く覚えていてくれたのです。私にはこの気持ちが伝わりました。人は「自分を大切にしている理由が分かった」という思いがある時、心からその人を大切にできる。私の学校のある女性がこの島を日本に返す決断をし、たまたまそこに行きました。「我が国がこの島を日本に返す決断をしたところがないので、私もその生活があるのだから、新しい生活を始めることにしました。」と。不法占拠とは、七〇年以上もそこに居る以上、その土地の文化や習慣を尊重し、その人々の生活を支える責任があります。元島の民の中には、自由な生活を送りたいという人もいます。しかし、元島の民の中には、今でも住んでいない人が多いです。これは、元島の民の中には、今でも住んでいない人が多いです。これは、元島の民の中には、今でも住んでいない人が多いです。

日本は医療、交通整備などの支援を行いました。このことをセルビアの人々は深く覚えていてくれたのです。私にはこの気持ちが伝わりました。人は「自分を大切にしている理由が分かった」という思いがある時、心からその人を大切にできる。私の学校のある女性がこの島を日本に返す決断をし、たまたまそこに行きました。「我が国がこの島を日本に返す決断をしたところがないので、私もその生活があるのだから、新しい生活を始めることにしました。」と。不法占拠とは、七〇年以上もそこに居る以上、その土地の文化や習慣を尊重し、その人々の生活を支える責任があります。元島の民の中には、自由な生活を送りたいという人もいます。しかし、元島の民の中には、今でも住んでいない人が多いです。これは、元島の民の中には、今でも住んでいない人が多いです。これは、元島の民の中には、今でも住んでいない人が多いです。

最優秀賞（京都市長賞）

北方領土の返還を願う

京都市立嵯峨中学校
三年 宇佐美 智也

八月、一年の中の単なる一か月に過ぎないと多くの人に思われているに違いはない。しかし、実は「北方領土返還運動全国強調月間」と定められている。

この事実を知っている日本国民はどれくらいの割合いるのだろうか。私自身は、中学校に入学し、北方領土についての作文を書くことや社会科の授業の中で学習を通して知ることになった。そして、街頭で署名活動が行われていることや北方領土青少年等現地視察支援事業を理解した。このようなことを以前の私のように「ほとんど知らない。」という日本人は、かなりの割合で存在するのではないだろうか。

ニュースなどの報道を見ると「北方領土についての対話が行われた。」という程度の紹介しかないことが多い。「今の北方領土の状況はどうなっているのか」や「北方領土が外交問題として何度も取り上げられているのはなぜか」についての報道は、あまりなされない。これでは、多くの国民の理解を得ることはならないし、関心を高めていくことに繋がらない。だから、北方領土問題の論議は、一部の政治家等でのみで行われていると感じてしまう。これは大きな問題である。この問題の事実や現状をしっかりと理解すれば政府だけでなく、多くの国民も北方領土返還への思いは強くなるはずだ。そうすれば、国民一人一人の声が、政府間の交渉に直に届くような状態となりうる。昨年の五月、ア

メリカ大統領のオバマ氏の広島訪問を実現させた要因の一つである被爆者からの手紙のように、元島民はもとより、多くの日本人の心の声をロシア政府に伝えていくようになってほしいと切に願う。

日本とロシアの協議は難航しているが、二国間の関係に雪解けを感じさせるようなエピソードはあった。それは、一九九〇年にロシアの三歳の少年、コンスタンチン君の命を救う出来事である。サハリン州に暮らしていたコンスタンチン君は誤って熱湯入りのバケツを倒し、全身の九〇％を火傷するという事故があった。重度の大火傷で、地元の病院では手の打ちようがなく、七〇時間の余命を宣告される事態となった。家族は、医療技術の進んでいる日本に最後の望みを託し、それに応えた日本政府は援助の手を差し伸べた。東西冷戦の影響が残る中、外務省が交渉してサハリンに日本機を「仮上陸」させ、コンスタンチン君を日本に連れてきた。医師の懸命な手術の結果、彼は一命を取り留め、回復するに至った。彼を救うための医療費は、日本での募金活動で賄われ、その額は一億円にもなった。これこそが協力であり、二国間の友好を示すものと感じた。私は、テレビの定番でこの事実を知ったときに強い衝撃を受け、心の底から感動した。

一七、二九一という数字は、終戦時に北方領土に住んでいた日本人の数を表している。終戦から七二年を迎え、その数字は残念だが減少の一途をたどっている。最後の一人となる前に、いや一人でも減ずる前に、北方領土問題の解決の糸口でもいいから見つけ出さねばならない。最近、ロシアのプーチン大統領は、千島列島に軍事施設を建設するため、滑走路を建設し、その他のインフラ整備も進めていると聞いた。しかし、択捉島には旧ソ連軍上陸に対した日本軍の戦車の残骸が残っている。武力

による占領をした旧ソ連と同様に、再びロシアが武力に頼ろうとしているのではないだろうか。軍事施設が増設されれば、日露の友好関係に水を差すことになり、深い溝ともなり得る。そうなる前に北方領土問題を平和に解決して欲しい。

日本とロシアが、歩み寄った歴史はある。ただ、二国間の関係は常に安定しているとは言い難い。私は、今までの出来事を振り返りながら北方領土返還への願いをまとめてきた。当然ではあるが、一人の力でどうなる問題ではない。だからこそ、繰り返しになるが、多くの国民が北方領土に関心をもつことが大切である。そして、思いを一つにし、その意志をロシアに届けていきたい。そして、これまであまり触れられてこなかったが、故郷を奪われた島民の人権問題も、この両国で考えていくべきではないだろうか。

これからの時代を託された私たち中学生にできることは、署名や募金を集める程度のことと思われるかもしれない。でも、一番大切なのは、北方領土問題と正面に向き合うことだと確信している。最初は、身近な人と少し話をしてみるだけでも良い。これを繰り返し、多くの人と交わり、考えを交換することを通して、早期解決と平和的な解決へ結び付けていけるのではないだろうか。私は、今までの両国間の出来事や日本人の努力などを調べる中で、改めて強い意志をもった。それは、北方領土の一日も早い返還を実現することである。